

北里大学北里研究所メディカルセンター病院 広報誌 百合樹 (ゆりのき)

第7号



次号より職員による力作写真が登場する予定です。楽しみに！

脳神経外科の紹介 ～安全かつ確実な低侵襲的手術を心がけて～

脳を手術する外科との意味から、昔から“脳外科”といわれますが、実際のところ、脳から脊髄・末梢神経に至るすべての外科治療を行う科であり、“脳神経外科”が正式な名称です。ぜひこの機会に知っていただければ幸いです。

当科は、北里大学医学部脳神経外科から3名の脳神経外科専門医が派遣され診療にあたっています。全員が藤井清孝教授（現・北里大学病院院長）のもとで手術手技を学び、そして医療に対する高い志を継承し、神奈川県北里大学病院脳神経外科の国内最



高峰の医療をそのまま北里研究所メディカルセンター病院で引き継ぎ、患者様に質の高い医療を提供していると自負しています。

その専門性は、脳血管障害、脳腫瘍、脊椎脊髄疾患、機能的脳神経外科疾患（顔面痙攣、三叉神経痛、舌咽神経痛など）に重点を置き、すべての手術で最新医療機器（脳低体温療法、神経内視鏡、神経超音波、術中神経生理モニタリング、術中蛍光造影法など）を駆使して、低侵襲、安全かつ確実な手術を心掛けているため、良好な治療成績を維持しています。特に脳卒中の外科疾患（脳動脈瘤、くも膜下出血、脳出血など）に対しては、各科の協力のもと24時間体制で三次救急レベルの治療を行い、さらには大学付属病院の脳神経外科として、他病院で治療困難と言われた症例に対しても積極的に外科治療を行います。

脳神経外科の病気は、病状が進行すると、神経後遺症や生命の危険性が高く、さらには手術を行っても成功率が低いというイメージがあります。しかしながら他の外科疾患と同様に早期診断・早期治療を行いさえすれば、ほとんどの病気で非常に良い治療結果が期待できます。当科では、緊急以外の開頭手術において、頭髪を剃らないで行う無剃毛手術を採用しているため、退院後はすぐに職場復帰していただくことが可能で、大変好評です。

当科では、これからも患者様に安全かつ最先端医療を提供し、そして安心した生活をサポートできるように、脳神経外科とこれを取りまく他部門（看護部、放射線部、生理機能検査部、リハビリテーション科、総合相談室、地域医療連携室など）とのチーム医療を大事にしていきたいと思っております。さらに脳神経外科医自身の技術の鍛錬と継承を怠らず、常に安定した治療成績を維持できるように精進し、地域医療の発展にも貢献してきたいと思っております。

鷲内 隆雄(脳神経外科部長)

「ともだちの輪」
はじめました

名前： 鈴木 雅信

職場： 眼科

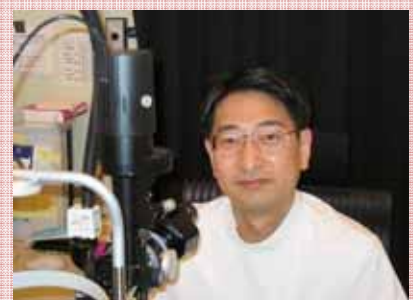
自己PR： 日日之好日～今日も元気だご飯がうまい！

趣味： 散策 瞑想

特技： 合気道 かめはめ波？

好きな食べ物： タンメン

次の紹介者： 池永 誠さん(健康管理センター 医師)主治医？



院内感染阻止のためにわれわれの行っていることをご紹介します ～感染制御対策室の活動～

平成 22 年 4 月、KMC 病院に感染対策部門として初めて感染制御対策室が設立され、実動部隊として、医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、事務員で構成された専門職による感染対策チーム[Infection Control Team(ICT)]を配し、「院内感染を起こさせない(感染を拡げない)」をモットーに、現在まで活動しております。



感染対策チームによる抗菌薬ラウンドの様子

病気の治療の場である病院は、その一方で多様な病原体が集まり、薬剤耐性菌が多く生息している点で、市中環境に比べて感染症が発生しやすい環境だといわれております。そんな環境の中、感染制御対策室では日々どんなことを行っているのかご紹介させていただきます。

日常的に院内での感染症の発生状況を把握し、感染拡大予防の為、手洗いを中心とした標準予防策の徹底、作業環境の改善、清掃方法、手順の指示・直接指導等をしており、月に 1 回程度、感染対策チームによる院内環境衛生の改善を目的とした環境ラウンドを実施しております。抗菌薬の使用状況や細菌検査室のデータを基に、カルテから

データを収集し、週に 1 回、感染対策チームによる抗菌薬適正使用を目的とした抗菌薬ラウンドで病棟を回り、注意喚起又直接指導を実施しております。また、感染症が確認された際は、病棟にて状況確認を行い、各病原体の感染経路に応じた対策を講じ、適切な隔離予防策(接触感染隔離・飛沫感染隔離・空気(飛沫核)感染隔離)をとるよう指示・指導を行っています。

職業感染防止対策として、職員の針刺し事故時の対策やワクチン接種事業等にも携わり、職員への教育・研修の一環として、院外講師を招き院内感染対策に関する講演会を企画したり、感染対策チームによる院内勉強会を行っています。

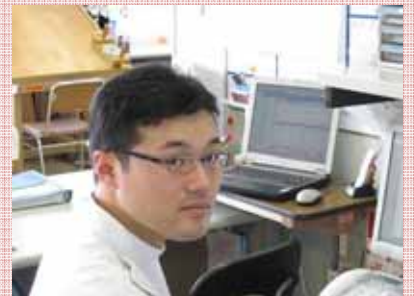
まだまだ設立されたばかりで、どこから手をつけていけば良いのか?どのように進めていけば受け入れてもらえるのか?と、問題は山積みですが、院内感染の伝播を防ぎ、患者様、当院で働かれているスタッフの方々を感染から守るためにこれからも活動ができればと考えています。 山口純一(感染制御対策室)



N95 マスクを装着した当院看護師

「ともだちの輪」
はじめました

氏名： 米澤 隆介
職場： リハビリテーションセンター
自己PR： 理学療法士として様々な患者さんのリハビリを担当しています。
専門は循環器疾患のリハビリです。
趣味： フットサル、バスケ、料理
特技： うどんが打てます。
好きな食べ物： そば
次の紹介者： 土屋 純さん(放射線部 診療放射線技師)大学の同級生

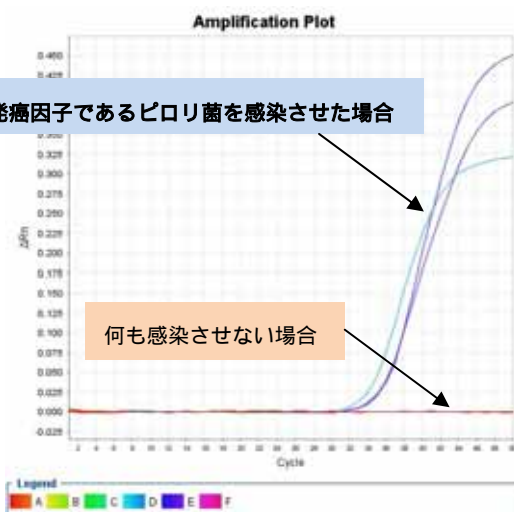


病院における研究部をご紹介します ～バイオメディカルラボラトリー～

皆さんこんにちは。研究部バイオメディカルラボラトリーの福山隆です。研究部の紹介と、私共が行っている研究の一部を紹介したいと思います。「研究部」といえば、病院職員の方は、「研修の時に手指の細菌検査を指導するヒト達」や、「時々環境調査に病棟に現れるヒト達」といった印象でしょうか？ややもすれば、院外の方からは「インフルエンザのワクチン作っているトコロ」(それは生物製剤研究所です)と勘違いされているかもしれません。研究部は KMC 病院の南館の裏手にある「離れ」に存在しており、5 名の研究員と 2 名の事務員で構成されています。業務内容は上述した感染対策の指導ももちろんですが、部署名のごとく研究を主体として取り組んでおります。研究内容は、感染症、自己免疫疾患、癌を主体とした新たな治療、診断、予防の開発です。今回は、私が主として行っている癌の研究について紹介いたします。



研究部 バイオメディカルラボラトリーおよび
医療環境科学センターのスタッフ



リアルタイム PCR による癌抗原の発現量解析
発癌因子の一つであるピロリ菌を細胞に感染させることで
免疫応答の標的となる新たな癌抗原が発現し始めた。

現在、癌の治療方法として、外科的切除、化学療法、放射線療法が挙げられますが、最近では自身のもつ癌に対する免疫応答を高めて癌を克服する「癌免疫療法」という言葉も浸透してきつつあります。確かに癌細胞に対する免疫応答は存在しています。しかし、その治療効果は満足いくものではありません。そこで私どもは視点を変えて免疫応答を「治療」ではなく「診断」として用いることを提案しています。現在、私どもは免疫応答の標的となる「癌抗原」について研究しており、発癌因子の一つであるピロリ菌の感染で細胞に癌抗原が出現することをつきとめました。今後は癌抗原を如何に癌の初期に検出できるか検討し、新しい癌診断方法を確立することを目指していきます。

本年度、KMC 病院はがん診療指定病院を目指すこととなりました。その中で私ども研究部は癌の早期診断方法さらには予防方法の確立を目標に、当病院への貢献、さらには「癌」という疾病の減少への貢献を

目指し、一步一步確実な歩みで研究に取り組んでいます。

福山 隆 (研究部 バイオメディカルラボラトリー)

名前：松井 俊通

職場：診療部 リウマチ膠原病内科

自己PR：北本にきて約半年で地域の整形外科医院の先生方との
地域連携を心がけています。

趣味：温泉です。

好きな食べ物：嫌いなものが少ないので、何でも食べます。

次の紹介者：竹内一さん(消化器内科 医師)同級生です。



「ともだちの輪」
はじめました

「カーボローディング」という言葉を聞いたことがありますか？

『カーボローディング』という言葉を知っていますか。

近頃ランニングがブームで走る方が多くなったのでご存知かもしれませんが、長時間運動の前に炭水化物を多く摂り、運動エネルギーとなるグリコーゲンを通常より多く体に貯蔵する栄養法です。私の趣味のマラソンでもこの栄養法により、後半も元気に走りきることができるようになり、栄養管理の重要性をさらに意識しています。



NSTメンバーは、そのチームワークを生かし患者様の栄養管理に取り組んでいます

当院のNST（Nutrition Support Team：栄養サポートチーム）を立ち上げ約4年が経ちます。NSTの役割は患者様の栄養管理です。実は患者様の入院日から栄養管理を始めさせていただいています。NSTは患者様一人ひとりの『カーボローディング』を目標としております。この場合、炭水化物を摂れという意味ではなく、患者様の様々なゴールに向けての栄養管理をサポートするということです。お口からご飯を食べられない方、手術前後の方、感染症や癌と戦っている方、糖尿病や肝臓病など慢性疾患と向き合っている方、など様々な患者様がいらっしゃいます。まずそれぞれの病気の治療が優先だと思いますが、その戦う力の源を支えたいと願うのがNSTです。



さて、そのNSTでの薬剤師の私の役割は、主に点滴の調整や薬自体の確認などです。きちんと必要なエネルギーや水分が入っているか、必要なビタミン・ミネラルや脂肪が加わっているか、など確認させていただいています。NSTのメンバーは普段はそれぞれの部署で働いていますが、毎週木曜日には医師、看護師、栄養士、検査技師、理学療法士と薬剤師で情報や意見をもち寄り、そのチームワークを生かし患者様の栄養管理に取り組んでいます。

人間、一人ではうまく走れません。支え、応援してくれる人々のおかげで、私自身も目標のサブスリー（マラソンで3時間を切る事）へ近づいています。願わくは患者様の病気というマラソンの支えや応援団になれるよう頑張っていきたいと思えます。

野本亜紀子（薬剤部 薬剤師）

編集後記

平素は本誌をご愛読いただき有難うございます。2010年も師走を向かえ、残りひと月となりました。皆様は今年一年を振り返るとどんな年だったのでしょうか？少し気が早いかもしれませんが、来年の干支は『卯年（うさぎどし）』です。卯年は“跳ねる”というイメージをお持ちかもしれませんが“草木が茂る”という意味があるそうです。皆様の2011年が充実した一年を迎えられることを御祈念すると共に本誌の内容もこれまで以上に“内容が茂る”ようにより一層力を入れてまいりたいと思えますので、ご支援の程、宜しくお申し上げます。（中）

発行者：北里大学北里研究所メディカルセンター病院
広報委員会

発行責任者：笹岡 大史

発行所：埼玉県北本市荒井 6 - 100

電話（048）593 - 1212（代）

発行日：平成22年12月1日